

猪名寺と謎の古代豪族・猪名部氏

猪名寺廃寺跡(いなでらはいじあと)

猪名寺乱太郎は、アニメ『忍たま乱太郎』および、原作『落第忍者 乱太郎』の主人公として多くの人を知る所です。また、上坂部小学校近くのJR塚口駅の次の駅として「猪名寺」は身近な所です。もともと「猪名寺」は飛鳥時代後期から室町時代にかけて存在した仏教寺院で、「猪名寺廃寺跡(いなでらはいじあと)」として石碑にその証を残します。これまでの発掘調査の結果、東に金堂(こんどう=寺で一番の仏様がある建物)、西に五重塔、これらを回廊(かいろう=各建物を回りながら結ぶろうか)が囲み、伽藍配置(がらんはいち=お寺の色々な建物の配置)が法隆寺(ほうりゅうじ=奈良県にある聖徳太子が建てた寺)とほぼ同じの寺院であったことがわかっています。伽藍は天正6年(1577年)の荒木村重(あらかむらしげ=伊丹、花隈、尼崎など35万石を有した織田家でも有数の武将。信長に逆らいむほんを起こす。)と織田信長の戦乱により焼失し、廃寺になったと推定されています。この猪名寺周辺の猪名川流域は、古くから猪名野または稲野(いなの)と呼ばれた地域です。

「猪名」の地名の由来

『日本書紀』(にほんしよき=奈良時代に書かれた歴史の本)には、新羅王(しらぎおう=古代の朝鮮半島南東部にあった新羅国の王様)から船造りの技術者が派遣(はけん=任務を負わせて他の場所に行かせること)住み着いたことが記され、猪名部御田(いなべのみた)という人物の名前が見られます。猪名部御田は、新羅国から「船を焼いた代償(だいしょう=代わりのものでつぐなうこと)として送られてきた帰化人(きかじん=よその国から来て住みついた人)の子孫」だろうといわれています。彼は建築・造船などの木工技術(もっこうぎじゅつ=木を使って色々なものを作る技術)に大変優れていて、船造りだけでなく宮殿建設に関わるなど、大活躍しました。非常に高い所にある柱の上でも、まるで猿が走るように身軽に動き回っていたそうです。「猪名部」の姓(せい=名字、上の名前)は、大和朝廷の職業部の一つである「猪名部」または「為奈部」[いなべ]に属したことから付けられました。

猪名部御田や猪名部真根(まね)をはじめとして、猪名部一族は、優れた木工技術者集団でした。天平勝宝4(752)年、名工・猪名部百世(いなべももよ)は、飛驒の匠(たくみ)らを指揮し、奈良の東大寺大仏殿を建立しました。現在、世界遺産に指定されている法隆寺(ほうりゅうじ)、興福寺(こうふくじ)などの建設にも関わっています。平安時代の『新撰姓氏録』(しんせんしょうじろく=古代の氏族の記録)では為奈部首[いなべのおびと]や猪名部造(みやつこ)、という人が登場します。猪名野の地名は、このような技能を持つ技術者の居住地、つまり「猪名部たちが住む野(土地)=猪名野」に由来すると考えられます。部首、部造は共に物部氏の同族と称していて、「日本書紀 雄略18年条」に猪名部が物部氏の所有とあることとあわせ、物部氏の管理下にあったものとみられています。つまり、猪名部氏は新羅からの帰化人で、その後物部氏の配下で「物部の血を受け継ぐ支系一族」と称した可能性が(仮説として)考えられます。

猪名川町(兵庫県)、西猪名(大阪府)、稲部町(滋賀県)、いなべ市(三重県)、伊奈町(愛知県)、伊那市(長野県)…これらの地には、猪名部に由来する史跡(しせき=当時の歴史がわかる場所)が、それぞれに残されています。飛鳥時代~、謎の古代豪族・猪名部氏は、地名に「いな」という2文字を残しながら、畿内(きない=山城, 大和, 河内, 和泉, 摂津の5ヵ国)から東へ移動していったのです。「猪名寺」の一語をたどれば、そこには古人の輝きや栄華(えいが=はなやかに栄えること)、夢や謎がうかがい知れます。

参考資料:毎日新聞2016年7月4日 愛知県地方版 歴史ウオーカー:95 古代豪族・猪名部氏ゆかりの東員町を歩く